○私は大得意で何にも知らぬ村人の爲めに展覽會を開いた、是は生れて以來單獨の展覽會として有名なものならん○紀念の爲に繪を惠んでやつたら大切に持つて歸つた人もあつた○私は斯な山奥に名を知られたのを非常に嬉しいと思つた○水彩畫の研究を始めてから日が淺いげれど兎に角描くことの出來るやうになつたのについては春鳥會、つづいて大下先生に御禮を申さねばならぬ○峠屋の村長さんは中學世界の口繪で知つたのか大下先生の名を知つてゐた。

## 水彩畫史及所感

東城町　田　吾　作

私が水彩畫の趣味を知たのは四五年前で、其端緒は七年前學校で一年許り兒戯に均しいことを習て水彩畫なるものを知た、其の後數年更に顧みなかつたが其後友人の筆になれるものを見て畫の趣味あることを知り一度畫筆を手にせんと繪具及用品を調へ試み而て其色彩の容易にあらざるに於て失望した、其後は臨本寫生に、不完全の野外寫生に數十葉を試み、如何にして友人は斯くの如き色彩を得しかと數十回の殆ど失敗に終れると其色調の輕易に得られざるを知ると共に余の水彩熱も已に挫折せんとせり、是の際一つの興奮劑を得た、即ち一葉の繪葉書は旅行先の親友TH君より投ぜられたるもの、其畫のTH君の筆になれるを知り、其色彩の高尚なるに驚き、斷念か中止の點は飜て奮發心となり、直に水彩畫の栞を求め默讀數回大に得るところあり、又模寫に寫生に數十葉を筆にせり、然れども其三四を除くの外は全く見るべきものなし依て心に思へりこれ必ず使用品の惡しきためならんと、而して自己の手腕如何には充分思及ざりき、この思は暫時にして足れり即ち用品は不足なく整ひたり、直に試み見事失敗せり、斯くしてこそ眞く畫の趣味も知るを得べく自然の大景にも亦親むを得べく、畫趣なき人の想像だに能はざる眞味も亦解するに至るべし、然れども、もと水彩畫專門を以て世に立たん決心もなく、其高尚なる、其究りなき自然の彩色に師事し、以て心身の高潔を得んがためなり、故に其進歩の如きもまことに微々たるをまぬがれず、然れども、健忍不拔以て進まば牛歩の遲々尚ほよく彼岸に達するのときあらん、たとへ其進歩は遲々たるも其精神的有形無形の効果に至りては枚擧するに遑あらず、まことに大下畫伯の言はれしごとく直覺的には心神の高潔健康の增進等其無形の効果に至ては頗る大なるならん、是れ田吾作と共に實地、諸君の認識せられしことならんと信ず、されど我作品に至ては依然として兒戯の域を脫せず自ら苦笑しつゝあり。

## 我が寫生

佐藤秋湖

△「みづゑ」を購讀し初めたのは去年の一月からで、之れからは早く寫生の人となりたいと云ふ念が絶えませんでした、尤も其の以前にも不正確な鉛筆寫生をやつて居りましたが、尙ほ黑繪の素養が必要とのお話から七八月迄繼續して居りました、然し遂に堪え切れなくなつて半ば手製に半ば買立と云ふ不完全な道

具を抱いて初めて水彩寫生を試みたのは炎暑燒くが如き八月下旬でした、松川原の裙、人燒場の煙筒と短き杉の樹立とを望むだ景で、常は容易な色と思つたのが筆を取つて向つて見ると中々現はせず、幾度か洗つて、漸く出來たのが極めて不自然なお耻かしいものでしたが、それでも自分の手になつたものだと思へは何となく愉快に感ぜられました。

△次の寫生には、廣々とした青田の遠く樺色の鐵橋を望む景で、中途村の子供が二三人又五六人集つて來ました、ハ、、お誂ひ向きだと微笑まれましたもの、畫が畫なので氣の毒にと思ひました、其の後此の頃では田舍家、黃色の田野、山間の紅葉等試みて居りますが、其の都度筆や道具に不足を感じて、最初のスケツチブツクが木炭紙となり、此の頃はワツトマンを使用して居る次第です、試みに位置撰定事項を擧げて見ますれば、可成人の來ない單純にして色彩の豐富な面白き場所なんです、自然も此の註文にはちと當惑するでせう。

△寫生を初めてからは無頓着であつた自然の變化が非常に面白く感じます爲めに、時の一刻も實に惜しいやうに思はれます、秋の夕野末に立つて無限なる自然の美彩にあこがるゝ時、あゝ思ふまゝに寫し得たならばと嘆息するのです、「みづゑ」の口繪及び記事が如何に私を喜ばしめませう、野外に出ては精神が淸淨になります、不快感がスツカリ拭ひ去られます。

△私は永く偉大なる自然の懷に抱かれつゝ行きたいと思ひます、あゝ無限の慰藉者よ!!!

## 新年會

見聞子

日本水彩畫會の新年會は一月二十四日に研究所で開かれた、寒いけれども好天氣で、霜解け道をふんで出掛けたのは午後の二時、丁度階上で批評が始まつてゐる處、見渡した處作品はいつもの半分位しかない、有力の赤城サンや夏目サン、新進の鈴木サンの繪が見えない、八木サンは大ぶ振つてる、批評は河合、大下、磯部、藤島諸先生で、叮嚀に一枚々々合評される、これが濟んだのは三時頃、いつもの通りお菓子に蜜柑、これで月次會終り、續いて新年會が始まる、直ぐ餘興で、赤星サンと上村サンのピヤノと琴の合奏、次はピヤノ獨奏、それからは會員の剛の者が吾も〳〵と出席して、琵琶、ハモニカ、假聲、詩吟、手品、大道商人、物眞似、七面相、金色夜叉、落語等があつて、六十の出席者の腮を外させた、中でも素敵に振つてたのは、大道商人、ガマの油、福太夫の假聲、西尾君の落語は本職跣足、駄目太夫の金色夜叉と來ては、一人で千鳥の聲も、浪の音も、艪の漕ぎ方も、宮サンになつたり貫一になつたり、餡パンの月を出したり中々忙しい藝當であつた、上村、松平兩孃の琴、六段の合奏を打止として散會したのは九時頃、それから跡に殘つてカルタをやる連中も何人かあつた樣子、何しろ大へんな新年會で、半日半夜腹を抱へて樂しく過した、いつもの例とあつて御馳走は五もくずしに茶椀むし、御酒がないので少數の上戸は失望したかも知れない。